

## 奨励

### 真誠の自由を愛す

|       |                    |
|-------|--------------------|
| 奨励    | 朴元 炯伶〔えもと・あれん〕     |
| 奨励者紹介 | 同志社国際中学校・高等学校宗教科教諭 |

だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

「わたしたちは、あなたのために

一日中死にさらされ、

屠られる羊のように見られている」

と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

（ローマの信徒への手紙 ８章３５―３９節）

### 「耐えて」紡いできた精神

いまから４年ほど前でしょうか、とあるＣＭで使われていた、

「こころ」はだれにも見えないけれど 「こころづかい」は見える

「思い」は見えないけれど 「思いやり」はだれにでも見える

という詩に大きなインパクトを受け、今でもふとした時に思い出します。これは詩人であり作詞家である宮澤章二さんの『行為の意味 青春前期のきみたちに』という詩集にある「行為の意味」という詩の一部です。東日本大震災でＡＣジャパンのＣＭが繰り返し放送された時に、この言葉は多くの人の心に残るものとなりました。宮澤さんは中学生向きにこの詩集を書かれ、他にも印象的な詩があります。そのなかで、次の詩を紹介させていただきます。

「耐える」

風や雨に 耐える

長い時間に 耐える

すべて 耐えることの意味の深さ

自然は決して急ぎはしない

冬が終われば 春が来て

草木 おのずから 花ひらき・・・・・・

春はまた つぎの夏を招き

大木に透明の樹液は流れつづけて

新緑となり 茂る青葉となり

とだえるものなど なにひとつない

急ぐことなく 耐えて

耐えながら おのれを鍛えて

そこに初めて開ける 真新しい風景よ

私たち一人一人に 成長の重さを 語れ

（「出発の季節」『行為の意味』ごま書房新社 ２０１０年）

この詩を読んだ時、新島襄が風雪をじっと耐えて、そっと咲く梅の姿を見て、人間もこう謙虚でありたいと詠んだ「庭上の一寒梅」を思い出しました。確かに、じっと「耐える」ことが多かった新島の学校づくりの中で、今、同志社が１４０年の歴史を、足を止めることなく歩くことができたのは、じっと耐えることから生まれる心を新島襄が大切に、同志社の精神がつくりあげられ、その意志を継ぐ者たちが大切に紡いでいったからです。

### Doshisha Spirit Weekによせて

今日は、この同志社スピリット・ウィークの礼拝の場に招いていただいたことを感謝しております。私は現在、同志社大学京田辺校地の向かい側にある同志社国際中学校・高等学校という所で聖書の授業の教員をしています。私自身、同志社での学びは大学院での３年間だけで、入学当初は同志社の歴史や創立者新島襄について、ほとんど知識のない状態でした。しかし大学院に入学して、個人的なことです。が、新島襄の永眠した１月２３日は私の誕生日であることを知り、少し縁のようなものを感じました。それでも、現在の職に就くまで同志社についてあまり知らずにきてしまったので、いざ新島襄について、同志社について授業や礼拝のなかで「生徒たちに伝えることができるのだろうか」と悩みました。この私の迷いが授業でも出ていたのでしょう、正直な生徒たちは「なんで聖書の授業で新島襄について学ばなければいけないのか」と、何度も言われてしまいました。国際中・高では、中学１年、高校１年生が、２、３学期に聖書の授業で新島襄について学びます。高校３年生では、１学期に新島襄の手紙や論文を読み、２学期では、新島襄生誕記念懸賞論文にチャレンジをします。実際は、生徒たちが口にするほど、聖書の授業で新島襄についてがつり、というわけではありません。しかしそれだけ印象が強いということなのだと思います。私も一人のキリスト者であり、教育者である新島襄の生き方や思想が、何かのヒントになればと、ここ最近が一番初めの授業で、ゆっくり時間をかけて「なぜ創立者や新島襄について学ぶのか」ということについて話をしています。授業なので、「同志社に入学した以上は、創立者や同志社の歴史について学ぶことは義務だ！」と言ってしまえば簡単です。しかし、新島襄が目指した教育は、教師が上から押さえつけるように教えることではなく、また「義務化」された学びをするのではなく、生徒一人ひとりが、あらゆる学びのなかで、自ら考え、自ら学び、自ら体得する。そのような自由な教育を大切にしていました。私たち教員は、自分の知識を生徒たちに伝える役割を担っています。しかしそれを受けた生徒たちがどのように受け止め、それぞれの人生に活かしていくのかは、生徒たちが学校生活のなかで、「同志社」という空気から何を感じ取っていくのかということに尽きます。

### 同志社の精神であるキリスト教

もちろん学校で生徒たちに一番感じ取ってほしいものは、同志社の精神と言える「キリスト教」の空気です。国際中・高では毎朝礼拝が行われ、いろいろな先生方からのメッセージをいただきます。授業とはまた違う角度で世界を見る新しい視点を与えられることはとても貴重な時間です。自由な校風のなかではなかなか難しい部分もあります。毎日礼拝があって、聖書の授業があって、キリスト教を押しつけられているのではない、そんなことを耳にすることも時々あります。そんな声が重なった時、学校における「キリスト教教育とは何だろう」と深く考え込んでしまいます。

しかし最近、同志社チャペルの定礎式での新島の式辞を読み、はっとさせられました。それはこの部分です。「そもそも教育は宗教と密接に関係するものであって、教育の基本は宗教にあるというべきである。（中略）それゆえわが同志社の教育もまことにキリスト教と密接な関係を有するものである。こうして今日この定礎式を行い、この建物を神に捧げるのは、行く末大いに喜ぶべきことであると思う。なぜならばこのチャペルはわが同志社の基礎となり精神となるものだからである。西洋諸国の学校は、宗教が教育にとって不可欠であることをすでに認識し、宗教を尊重しているのであるが、わが日本ではまだそうはなっていない。キリスト教を蔑視するのが学生の常である。わが同志社にもこの宗教を嫌う者がいないわけではない。それでも今日このチャペルを神に捧げることができるのは、まことに進歩を表わしているというべきである。また今日に時勢を見るならば、このチャペルはまことにわが日本に対しても大いに関係があるものであると信じている」。そして最後には「チャペルは学校から絶対に無くしてはならないもの」、「わが校の学生がこれをもって精神となすべきものであるということにつくる」（注（１））とスピーチをしました。同志社英学校が創立されてから１０年経って建てられたチャペルは、新島が「この同志社の教育はキリスト教なくしてはありえない」という強い思いが込められたひとつの形です。この思いをあらためて読み「当たり前だけど同志社はキリスト教を基本にした学校なんだ」と勇気づけられました。しかしいつの時代も、なのかもしれませんが、「キリスト教を蔑視するのが学生の常である。わが同志社にもこの宗教を嫌う者がいないわけではない」という言葉には、新島の苦勞も垣間見えます。しかし新島はじっと耐え、次なる「同志社大学設立の旨意」へと繋いでいきました。そしてそこでは、「良心を手腕に運用する人物」を産み出す教育を目指すことが述べられ、「ただ神を信じ、真理を愛し、他者に対する思いやりの情に厚いキリスト教の道德によらなければならない」と信じて、キリスト教主義を徳育の基本とした」（注（２））

と、同志社の精神をよりはっきりさせました。

「ただ神を信じ、真理を愛す」という言葉は新島が生涯大切にした言葉の一つでもあります。日本を脱出して、アメリカでいろいろな人に支えられ、また同志社がいろいろな困難のなかにありながらも「大学設立」が形になる手ごたえを感じて、あらためて「ただ神を信じて、真理を愛する」ことの大切さを実感したはず。新島は、「愛とは何か」という説教のなかで、「キリストの愛は広く、深く、また高い」と語り、「キリストはこの愛をもってこの世に生まれ、神の道を説かれ、私たちを救うために荊棘の冠を被せられ、十字架に磔られた。また、この愛をもって私たちを近くに引き寄せ、今も私たちの心に働きかけられている。愛は忍び、許すものである。一見、弱々しく無力に見えるが、天下の誰が愛に敵対しようか」（注（３））と語っています。先ほど読んでいただいた聖書の中には、「キリストの愛から私たちを引き離すことはできない」とありました。私はこの言葉に尽きると思います。どんなに私たちが神から目を背けようとも、または私たちが世のことで心を騒がせていても、神さまは私たちをあきらめない。そして、探し続け、見つけ、受け入れてくださる存在である。その確信が新島襄の「神を信じ、真理を愛す」という言葉につながっていきます。その確信があるからこそ、どんな困難ななかにあってもじっと耐えて時が来ることを待つことができるのです。そうしたキリスト教の精神の中で、同志社の精神はゆるがない、確かなものへとなっていました。

良心とは

同志社英学校創立時点では前端的に「キリスト教」を押し出すことができませんでしたが、大学設立運動の時には、文書の中で明確化されます。大学設立は、単にキリスト教を広めるだけに大学をつくるのではないと明言し、「一国の良心ともいべき人たちの養成」を目指すと言っていました。もちろんこれは１００年かかる大きなプロジェクトであるとも言っていますし、勝海舟には２００年かかるとも言っています。「大学設立の旨意」が出されてから、１００年たち、２００年まであと６０年を前にして、現在の同志社は、新島の意志を引き継ぎ、「ただ神を信じ、真理を愛し、他者に対する思いやりの情に厚いキリスト教」を基本とした、「一国の良心というべき人たち」候補である学生を、養成することはできているのでしょうか。

同志社国際の高校３年生が、２学期では新島論文にチャレンジをしている、と冒頭に話しましたが、今年は多くの生徒の論文を読んで、少し今までと違う空気を感じました。それは、今年の論文のテーマには、新島襄の教育思想や、キリスト教教育、また同志社の自由、良心について書かれた論文が例年に比べて多かったことです。このテーマに取り組んだ生徒たちは、創立１４０年を迎えるにあたって、現在の同志社が新島の目指した教育を受け継ぐことができているのだろうか、という疑問を投げかけています。彼らの論文を読んで、もししたら彼らが今の社会の空気に何かを感じ、そのなかを生き抜く自分達がこの同志社で学んでいることへの振り返り、また今の同志社が新島襄の目指した教育をきちんとできているのか、ということ私達以上に冷静に前を見据えていると感じました。そのなかである生徒は、このように述べていました。

「新島はこのキリスト教精神における『良心』と『自由』によって、一つの考え方に縛られない創造力豊かな人材を日本の世に送り出し、日本をキリスト教がリードし、世界との調和を目指したのだと考える。しかし新島がこの世を去った後の日本は悲しくも、一つの考え方に縛られ、戦争という過ちを引き起こし、また、現在も偏った考え方を持ったものが多い様に見える。『良心』すなわち新島の精神を受け継ぎ、隣人を愛し、自分ではない何かのために自己を犠牲に出来る心、『自由』すなわち創造力に富んだ考え方をもち、一つの考え方にとらわれない心を有用に使うことのできる人材が新島襄と同じ志を持つ、この学校の立派な学生であると言えるのではないだろうか。（中略）新島襄の意志を受け継ぐことが同志社に通う学生の義務であると私は考える」。

これは、あくまである生徒がこの同志社で学んで自分なりに出した「良心」、「自由」に対する答えの一つです。もちろん他の視点で語られている論文もあります。しかしその多くは、私たちが言葉で語る以上に、この同志社での学びのなかで、その空気を全身で受けとめ、自分たちが何を大切にすべきなのかをきちんと分かっているのだと改めて思いました。そして私自身があらためて、この同志社の精神は何であるのかということを考えさせられました。

真誠の自由を愛す

その精神を表す一つが、今回の説教題にもつけさせていただいた「真誠の自由を愛す」という言葉です。これは新島の遺言の中にあります。この真誠の自由とは何であるのか。この言葉が、「自由」という言葉に乘っかり、周りを見ないで自分の主義主張だけを押し通し、好き勝手にすることではない、ということは分かります。「神を信じ、真理を愛すること」を新島は自らの信仰の柱としていました。新島は、人の罪のために血を流され、十字架につけられたイエスの愛に対して繰り返しその愛の深さと広さ、高さを語りました。イエスは、自分の価値観の押しつけをし、世の中の騒がしさに振り回され、互いに赦し合えない、愛し合えない人々を厳しく叱りつけました。そしてそのような思いから解放されることが神の意思に従って生きることであり、「真実の自由」を与えてくださる神の愛の深さを繰り返し説きました。新島自身もアメリカでこの神の愛を実感し、真誠の自由という、「良心によって束縛された自由」の素晴らしさを同志社の精神として尊重すべきであると、息を引き取る瞬間まで願ひ続けました。

「志を同じくする者」が集まったこの同志社はまもなく１４０年を迎えますが、最近では、「自由」や「良心」に基づいた教育が新島の意思の通りできているのだろうかと不安になることが増えました。だからこそ、私たちは今一度「真誠の自由を愛す」という言葉を通して、この同志社で大切にしていけることは何であるのかを見つめ直す必要があるのではないかと思うのです。「一国の良心たる人物を養成する」同志社は、神の御手によって導かれた学生、教員、職員がお互いに学び合い、磨き合い、そして尊重し合うなかで、良心を育てていく学び舎です。どんな困難にあっても「キリストの愛から引き離されることはない」という強い支えがあるので、同志社に関わる一人ひとりが、新島の志である真誠の自由を愛し、困難をじっと耐える梅の木のように毅然とした態度で世の中と向き合う強さをもてる人が、新島の望んだ「良心を手腕に運用する人物」なのだと思います。

神さまによって導かれている道は揺るがないものであることを、私たち一人ひとりが信じて、力強く新島の意思を受け継ぐ一人として、今の歩んでいる道をしっかりと踏みしめていきたいと思います。

〔注釈〕  
（１）現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善 ２０００年 １８１～１８２ 頁  
（２）同 ２１６頁  
（３）同 １９８頁